

言葉で 治療する

ぼくは内科医。三十六年間、田舎医者として働いてきた。命を支えるあたかな医療がしたいと思ってきた。

すい臓がんの男がいた。すでに転移があった。東京の病院にかかっているとき、すでに男は、病気のことをすべて受け入れていたが、人生をあきらめていなかった。決して痛みを口にせず、一人で耐えていた。しかし、男はあるときから心を閉ざすようになった。

痛みがひどくなった。痛みを訴えた。主治医は「痛くない、痛くない、我慢、我慢」と押し付けるように言った。次の言葉が出なくなった。コミュニケーションを断たれたのだ。それから、男は家族ともあまり話をしなくなった。ぞんざいに出された痛み止めは効かなかった。男は前向きに生きることをあきらめかけた。家族は、男の心を楽しんであげたくて、諏訪中央病院の緩和ケア病棟にやってき

た。この男の痛みを緩和してあげたいとぼくたちは思った。

痛みは肉体的な痛みだけではない。心の痛み、社会的な痛み、スピリチュアルな痛みの四つがあるといわれている。がんになって、助からないことがわかったときのこの男の心の痛みは想像できるだろう。社会的な痛みもあった。やり残している仕事を何とか完成させたい、ただで完成できないという悲しみ。まだ小さな子どもや家族を残していく心配、これが男の痛みになっていた。スピリチュアルな痛みもあった。この世から自分がいなくなるという不安、霊的な痛みともいう。

互いに幸せな一瞬だったように思う。言葉の力は大きいと思う。

白血病になった若い女性が、主治医から「99%助からない」と言われた。あきらめかけたが、あきらめきれない。現実逃避もしたくなる。

そんな彼女の心を正気づかせたのは、お姉さんの言葉だった。「何にもしなければ助かる確率は0%。チャレンジすれば1%助かる。1%もあるやん」

骨髄移植が成功し、彼女は白血病が完治した。彼女は自分の体験から、当時、

これらの痛みは、肉体的な痛みと相關している。モルヒネを使いながら、気になっていた仕事を完成した。家族と小旅行に行った。いい時間を過ごした。四つの痛みが緩和された。男は最後まで自分らしく生きることができた。家族や仲間「ありがとう、さようなら」と言葉を残して逝った。

ある乳がんの女性は、荒れている高校の生徒たちの前で、何度か「命の授業」をした。最後の授業は、自分の臨終の場面だった。息も絶え絶えの病床に、なんと生徒たちが集まった。「来てくれてありがとう。私をよく見て」

乳がんの患者さんは自分の最後を、力を振り絞って見せた。「人が死ぬということは、歩けなくなり、ご飯が食べられなくなり、お水が飲めなくなる。当たり前のことの一つずつ

アメリカで始まったばかりの骨髄バンクを日本にもつくろうとする。このときも、お姉さんの言葉が背中を押す。

「あなたのために骨髄バンクは間に合わないかもしれないけれど、ほかの人が助かるかもしれない。あなたが死んだら、私とお母さんが引き継ぐ。だから、やれることをやりなさい」

自分のためよりも、ほかのだからのために行動を起こすときに、大きな力がわいてくる。現在、多くの人が登録している日本の骨髄バンクは、この言葉をきっかけにできていったのだ。

乳がんの女性は亡くなった。白血病の女性は助かって、今も骨髄バンク普及のために活動している。どちらの女性も、命の土壇場で言葉によって救われた。

言葉を通して人間は生き抜いていく。言葉を通して人間は納得して死んでいく。言葉は大切だと思った。

鎌田 實

1948年東京都生まれ。諏訪中央病院名誉院長。東京医科歯科大学医学部卒業後、36年間、医師として地域医療に携わり、チェルノブイリとイラクの救援活動にも取り組む。2009年ベスト・ファザー・イデオロポン賞（学術・文化部門）受賞。ベストセラー『がんばらない』をはじめ、本文に紹介されているエピソードなども収められた『空気は読まない』『人は一瞬で変わる』など著書多数。

